

佐久市新品目導入試験事業

令和5年度事業報告書



佐久市営農支援センター

1 新品目導入試験事業の目的と令和5年度の事業の経過について

当事業は、新品目の農作物や新技術について、佐久市の気候や風土に合い、かつ経済性を発揮できるかの試験をし、適合する品目等において農業者へ普及を図るために、当佐久市営農支援センターが試験業務を受託し、佐久市跡部において事業を進めています。

本年度は本事業の受託13年目となり、引き続き「収益性の高い転作作物の推進と新技術の導入・実証」「新たな佐久市ブランド製品の育成」について、より普及拡大を目的として取り組みました。

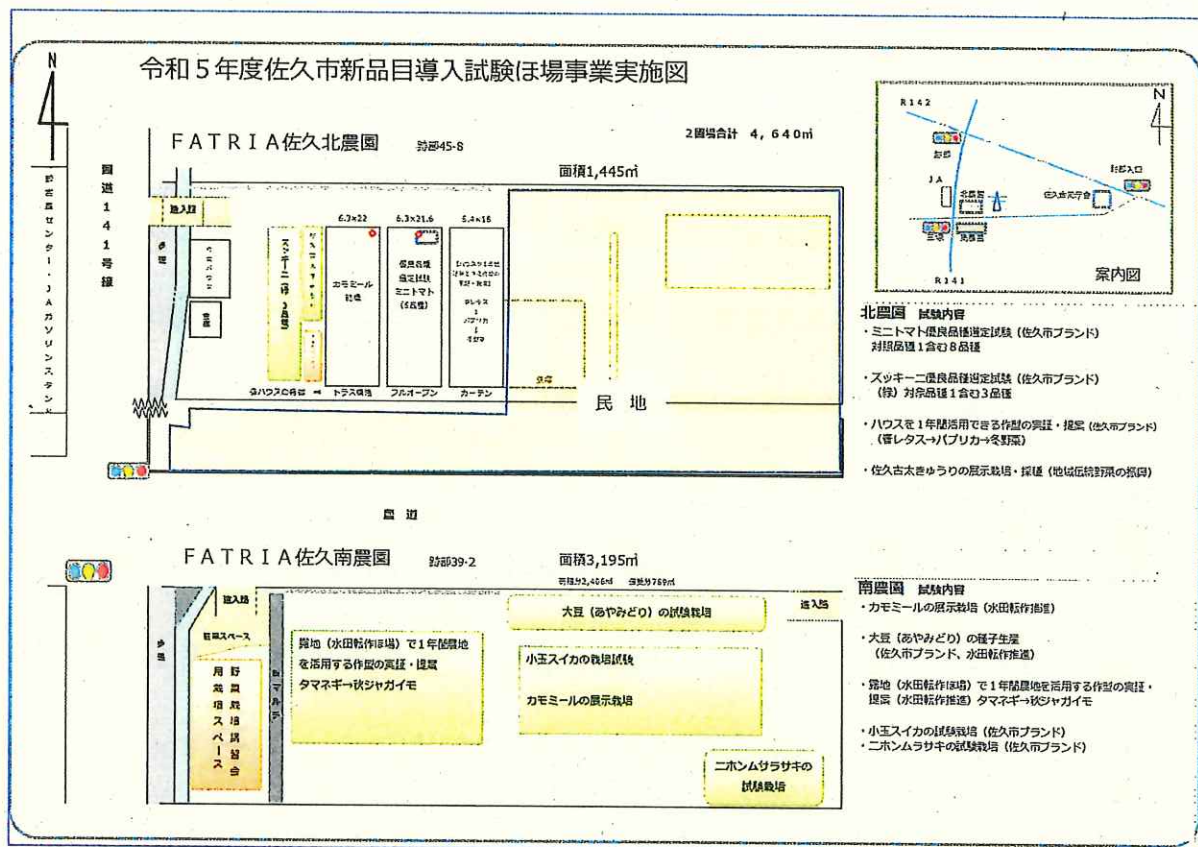
目標の1つ目である「収益性の高い転作作物の推進と新技術の導入・実証」については、カモミールや大豆（あやみどり）などの作物を実証することで、付加価値が高く比較的取り組みやすい作物などについて検討を重ねてまいりました。

2つ目の目標としての「新たな佐久市ブランド品の育成」では、地域の特性に合いつつ、「佐久市らしい」農産物の実証栽培試験を実施しました。

地域の主力農産物であるミニトマトの優良品種の選定試験の実施、保存会が立ち上がった佐久古太きゅうりの展示栽培、パプリカの施設栽培の前後でハウスが空いている期間に栽培できる品目を試験し、年間を通じてハウスを活用できる作型の試験を実施しました。

試験栽培で終わりとならぬよう、消費者の嗜好に合う販売を見据えた取組の一環として、首都圏からの利用者が多いキャンプ場で生産された農産物を販売し、消費動向の確認や当事業のPRを実施しました。

2 令和5年度新品目導入試験事業の概要



3 令和5年度に取り組んだ試験の内容について

(1) 「収益性の高い転作作物の実証と新技術の導入試験」

ア カモミール展示栽培

令和4年12月～令和5年6月

イ 大豆 (あやみどり) の栽培試験及び種子生産

5月～12月

ウ 露地 (水田転作ほ場) で1年間農地を活用できる作型試験

(ア) タマネギ収穫後の秋収穫のジャガイモ生産

令和4年10月～令和5年6月 (タマネギ) →9月～11月 (ジャガイモ)

(イ) タマネギ

令和5年10月～栽培中

(2) 「新たな佐久市ブランド品の育成」

ア ミニトマト優良品種選定試験

3月～11月

イ ブッキーニ優良品種選定試験

7月～10月

ウ ハウスを1年間活用できる作型の実証・提案

(ア) 春レタス

2月～5月

(イ) パプリカ

5月～10月

(ウ)ホウレンソウ・コマツナ ほか

11月～2月

エ 小玉スイカの試験栽培

6月～8月

オ ニホンムラサキの試験栽培

令和4年6月～終了

カ 伝統野菜「佐久古太きゅうり」の栽培展示と栽培講習会

4月～10月

カモミール展示栽培

1 展示栽培について

カモミールを転作作物とし推進するため、平成23年度から佐久市の気候に合う栽培形態や省力化を検討する試験を実施している。

同時期に発足した、JA佐久浅間カモミール研究会の13名の生産者で、毎年3,000kg程度の出荷がなされている状況となっているが、今後、更なる生産者を増やしていきたい。

そこで、令和5年度は、展示栽培を行い、普及事業を中心に実施した。

2 展示栽培（普及事業）について

下記のとおり、カモミール刈り取り体験会の開催をした。

- ・日 時 令和5年5月25日（木曜）午前10時00分～11時40分
- ・会 場 佐久市新品目導入試験ほ場
- ・参加者 21名
- ・作業内容 刈り取り、乾燥作業
- ・座学の実施 栽培方法や市出荷方法について
- ・その他 NHK、信濃毎日新聞、佐久市民新聞からの取材があった。

3 研修活動について

① 令和6年1月23日

島根県大田市カモミール生産組合
の視察研修の受け入れ

② 令和6年2月13日

全国6カ所の生産地の参加による
カモミール生産地オンライン
情報交換会



↑ 刈り取り作業



← 乾燥作業

大豆（あやみどり）の試験栽培と種子生産

1 試験目的

水はけの悪い転作水田での高畝栽培での栽培試験。

また、市内であやみどりを豆腐に加工し販売する業者がおり需要はあるが、種子の供給量が少なく生産拡大が図りにくいことから、試験ほ場で種子の生産を行う。

2 試験方法

(1) 場所

種子生産	跡部
試験	入澤

(2) 栽培管理・施肥

ア 栽培面積

(跡部) 150 m²

(入澤) 1,600 m²

イ 栽培経過

(跡部)

施肥 (10aあたり)

元肥 大豆642 86 kg、炭酸苦土石灰150 kg、
ペレット堆肥100袋

6月19日 播種 (播種後、除草剤ナブ乳剤を散布)

11月14日 収穫

12月～ 乾燥後、選別

(入澤)

施肥及び、栽培管理については圃場管理農家が実施

営農支援センターでは、播種及び収穫作業を実施

5月31日 畝立て同時播種機により播種

11月24日 汎用コンバインにより収穫

12月～ 乾燥後、選別



↑ 播種後3週間後のほ場



↑ 畝立て同時播種の様子

3 試験結果

(1) 収量調査 (10a当たり換算) 単位: kg

ほ場	収量	参考 (R4)
跡部	154	164
入澤	12	—

(2) 収穫した大豆粒の大きさ (各ほ場、20粒抽出に平均値)

ほ場	大きさ
跡部	9.83mm
入澤	8.62mm



←収穫期の入澤ほ場

入澤での汎用コンバイン
による収穫の様子 →



4 考 察

・水田で作付けした場合、湿害による発芽不良が多く発生していたが、畝立て播種においては欠株が生じず、ほぼすべてにおいて発芽が確認できた。

・跡部のほ場は昨年とほぼ同じ量の収穫ができ、来年度用の種子を確保することができた。

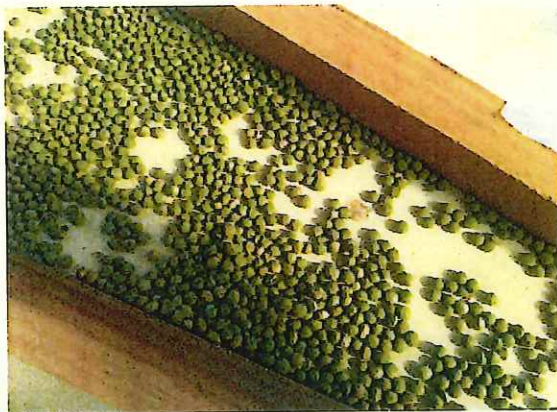
・跡部のほ場は、令和4年度は播種してから2～3週間後に除草剤を散布したところ効果が薄かった。

そこで、今年はイネ科植物に効果のある乳剤を播種直後に散布した。

その結果、雑草に負けることなく、良質な大豆が大量に実った。

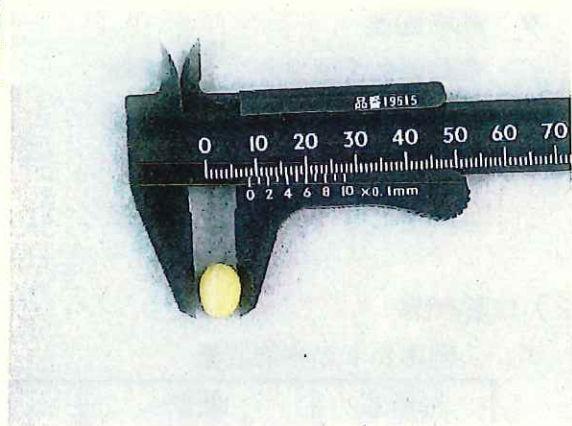
・入澤のほ場は播種後の除草剤散布を行わなかったことから雑草が覆い茂り、大豆より雑草の草丈の方が高く、日陰となった結果、大豆の生育に影響が生じた。

また、コンバインによる収穫を行ったが、草が機械内部にからまり、作業効率が悪かった。雑草防除の対策が必要だった。



←選別中の様子

大豆粒の大きさの試験の様子→



露地（水田転作ほ場）で1年間農地を活用する作型の実証・提案

1 試験目的

主として直売所に出荷している農業者をターゲットに、水田転作ほ場でも栽培できる品目を用いた新しい作型の提案を行い、栽培規模の拡大を図る。

また、転作を検討する農業者に対する判断材料の一つとしてデータを取得する。

令和5年度は令和4年度に定植したタマネギを収穫後、秋にジャガイモを定植した。

2 タマネギ

佐久地域で一般的に作付けされているネオアースと、長野市などで作付けされている七宝甘70の2品種を用いて、施肥量による収量の違いを検討する。



試験区

(1) 試験方法

ア 供試品種

ネオアース、七宝甘70

イ 栽培管理・施肥

(ア) 栽植密度 畝間90cm、株間15cm

(イ) 元肥(10a当たり)

化成 さくあさま野菜1号30kg、硫安4.6kg

有機 BB有機物語87kg、粒状鶏ふん47kg

化成+有機 望ちゃん38kg、粒状鶏ふん73kg

(ウ) 追肥(10a当たり)

さくあさま野菜1号50kg

ウ 栽培経過

令和4年9月7日 播種

令和4年10月19日 定植

令和5年2月6日 追肥

令和5年6月13日 収穫



収穫直前の様子

(2) 試験結果

ア 1個あたりの平均収量

品種名	個数	重量	単重
化成	30個	11.9kg	397g
有機	30個	8.8kg	293g
化成+有機	30個	10.2kg	340g

※各試験区の中から30個収穫を行い、平均の重さを調べた。

(3) 考 察

タマネギ1個あたりの収量は、化成のみの施肥を行った試験区が一番多かった。

2番目に収量が多かったのは、化成と有機の施肥を行った試験区だった。

有機のみの試験区が最も収量が少ない結果となった。

このことから有機のみの場合、施肥量を増やす必要があったと考察できる。

次年度は、有機の施肥量をどのくらい増やせば、化成並みの収量になるか調査したい。

次年度以降も有機農業の推進を図るため、様々な試験を行うこととする。



収穫したタマネギ

2 ジャガイモ（秋収穫）

タマネギ収穫後、秋収穫のジャガイモの栽培を行った。

結果として、1株当たり1.5kgの収穫量となったが、サイズがS規格以下となっており、収量確保のためサイズアップが求められるところである。

しかしながら、10月、11月に新ジャガイモとして、直売所での販売が可能なことから、タマネギと組み合わせた年2作の有望品目である。

播種を早めて、生育期間の確保と、収穫を10月上旬に設定し、年2作の設定が可能か、検証をしていく。

品種 アイマサリ

令和5年9月6日 播種

令和5年11月14日 収穫

施肥 さくあさま野菜1号150kg、もちづき有機3t（10a当たり）

ミニトマトの品種選定試験

1 試験目的

平成24年度より継続して実施している事業であり、佐久市内の有力品種であるサンチェリーピュアより耐病性に優れ、なおかつ食味や樹勢、出荷規格などにおいて良い品種を探すために、対照品種のサンチェリーピュアを含む8品種で試験を実施。

2 試験方法

(1) 栽培管理・施肥

ア 元肥（10a当たり換算）

特肥いきいき70kg、ジャンプ有機36kg、炭酸苦土石灰63kg、
なたね粕27kg、FTE4kg

堆肥（もちづき有機）1,818kg

イ 追肥（10a当り換算） トミーブラック液肥 272kg

ウ 畝間×株間 95×40cm

エ 栽培経過

（ア）播種 3月17日

（イ）定植 5月17日

（ウ）収穫開始 7月21日

（エ）優良品種選定試験 10月3日

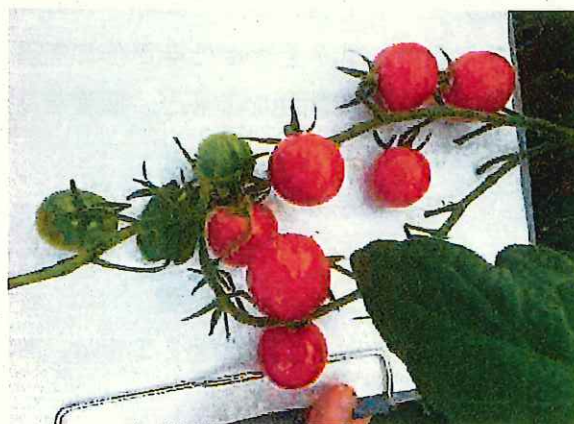
（オ）収穫終了 11月10日

3 試験結果

品種名	一般特性	収量性	耐病性	商品性	総合	次年度再検討	次年度実用
(対照)サンチェリーピュア	(B)	(B)	(B)	(B)	(B)		
リリカ	B	A	B	B	B		
ランゼ	B	A	B	A	B	○	
恋味アニューズ	B	B	B	B	B		
ルージュジャポネーゼ	B	B	B	B	B		
TYダルタリー	B	B	B	B	B		
A19M311	B	C	B	B	B		
MS-1354	C	B	B	B	B		

※判定基準 対照品種と比較して【A:優れる B:同等 C:劣る】の相対評価を記入

品種名	糖度 (%)
(対照)サンチェリーピュア	8.1
リリカ	9.6
ランゼ	8.3
恋味アニューズ	8.1
ルージュジャポネーゼ	9.7
TYダルタリー	8.1
A19M311	9.5
MS-1354	10.2



↑ 品種選定試験中のミニトマト

4 各品種の考察

(1) リリカ

光沢は対照品種より無いが、問題の無いレベル。果形丸く、果実は若干小さめ、糖度は試験品種中上位クラスだが測定値程の甘味を感じない（ゼリー量少ない?）。葉が小さく草勢はおとなしい。条件により日焼け果の発生が懸念。又、後半バテ気味。追肥のタイミングで収量を更にあげられるか。

(2) ランゼ

光沢は対照品種より無いが、問題の無いレベル。果形丸く、果実は対象品種並、食べたあとの皮残りなく糖度も高め。総体に草勢はおとなしいが、葉の大きさも適度で後半もしっかり結実する。

(3) 恋味アニューズ

前半草勢強く玉が大きい。後半勢い落ちた。果肉が硬く食感が異質。節間短め、果房が長いので低段では地表に果実が接触。

(4) ルージュジャポネーゼ

初期の結果数が多い、中期以降草勢弱まり小果が目立つ。初期にトガリ果多く、後半でも真円にならないが商品性を損なう程ではない。艶はあるものの色味は若干薄い。糖度高く食味は良い。

(5) TYダルタリー

初期は草勢強く、果実は若干大き目、複果房が発生していたが、後半草勢弱まった。花どまりが悪く先端の花は結果しても小果なので、摘花した方が良かったか。糖度は試験品種中一番低かった。

(6) A19M311

暴れ気味の樹が多く肥料、水に敏感な印象。後半草勢は強いものの、単果房多くかつ小玉傾向。食味は糖度、酸味とも試験品種中最もバランスが取れていた。

(7) MS-1354

試験品種中、糖度が最も高いが酸味が少なく嗜好性もあるが旨味を感じない。又、果皮が厚く食した時、皮残りする感がある。通常管理においては皮が厚く裂果は無いが、厚いことにより膨軟性に懸念（干湿差で裂果の虞）。果実の揃いが良くなかった。

ズッキーニの品種選定試験

1 試験目的

平成24年度より継続して実施している事業であり、佐久市内の有力品目であるズッキーニ
秋季収穫品種について、樹勢や出荷規格などにおいて良いものを探すために対照品種のグリーン
ポート2号を含む3品種での試験を実施。

2 試験方法

(1) 栽培管理・施肥

ア 元肥（10a当たり換算）

さくあさま野菜1号80kg、炭酸苦土石灰80kg、ようりん27kg、
堆肥（もちづき有機）1,200kg

イ 追肥（10a当り換算）

さくあさま野菜1号20kg

ウ 畝間×株間

90×80cm

(2) 栽培経過

(ア) 播種	7月7日
(イ) 定植	7月28日
(ウ) 収穫開始	8月29日
(エ) 優良品種選定試験	10月3日
(オ) 収穫終了	10月24日



↑試験栽培中のズッキーニ

3 試験結果

品種名	一般特性	収量性	耐病性	商品性	総合	次年度再検討	次年度実用
グリーンポート2号	(B)	(B)	(B)	(B)	(B)		
NPQ-025	A	A	B	B	A		○
試行S8	B	B	B	B	B		

※判定基準 対照品種と比較して【A:優れる B:同等 C:劣る】の相対評価を記入

4 各品種の考察

(1) NPQ-025

果色は艶のある緑で対照品種と遜色ない。若干果柄が短く、節間が短い為、収穫時の入鉢に難があるが、変形果なく収量性が高い。

(2) 試行S8

果色は濃緑で試験品種中最も濃い。収量性は対照品種より高いが、NPQ-025よりは劣る。不良果は対照品種並であるが、先太りの発生。又、収穫中期以降の肥培状況で果実が細ると曲がりが見られた。



←品種選定試験

試験栽培中のズッキーニ→



ハウスを1年間活用できる作型の実証・提案

1 試験目的

主として直売所に出荷している農業者をターゲットに、「1年間ハウスを活用し続けるモデル」として、新しい作型の提案を行う。これにより、野菜栽培に取り組む農業者に新しい品目の選択肢を広げ、栽培規模の拡大を図る。

市内で栽培されているパプリカのハウスを想定し、パプリカの前作に春レタスを、後作として冬野菜（ホウレンソウ・コマツナ）を栽培する。

2 施設環境

- ・ハウス内張には多層断熱被覆資材を使用し、防寒対策を施す。
- ・環境制御システムにより自動で外張及び内張を開閉することで温度管理を行う。

3 春レタス

パプリカの前作として春レタスを栽培し、市内産が少ない時期の出荷を目指す。

令和4年度の試験では2月上旬に定植し、収穫時期が4月上旬だったが、今年度の試験では、育苗の遅れから定植が2月中旬となり、収穫がサニーレタスにおいては4月上旬、玉レタスの収穫が4月下旬となった。

(1) 試験方法

ア 供試品目（品種）

サニーレタス、玉レタス

イ 栽培管理・施肥

(ア) 栽培面積 50 m² (サニーレタス 25 m²、玉レタス 25 m²)

(イ) 栽植密度 畝間 90 cm、株間 30 cm (ちどり 3 条)

(ウ) 元肥 (10 a 当たり換算)

もちづき有機 2.5 t、さくあさま野菜 1 号 166 kg、炭酸苦土石灰 166 kg

(2) 栽培経過

(ア) 定植 2月22日

(イ) 収穫 3月29日～5月8日



試験区



栽培中のレタス

(3) 考 察

加温なしのハウスも、多層断熱被覆資材の使用等の防寒対策を行うことで、収穫することが確認できた。

2月中旬の定植になってしまったが、4月上旬から5月上旬にかけて収穫できた。よって、5月に次期作のパプリカの苗を定植することに間に合ったが、より販売単価の高い4月中収穫を終えるよう、育苗について考慮する必要がある。



←試験ほ場の
玉レタス



←試験ほ場の
サニーレタス

4 夏野菜（パプリカ）

（1）試験方法

ア 供試品種

ナガノ（赤系）、ヘルシンキ（黄系）

イ 栽培管理・施肥

（ア）栽培面積 50 m²

（イ）栽植密度 畝間90 cm、株間50 cm

2本仕立てで栽培

（ウ）栽培経過

定植日 5月15日（32株定植）

パプリカの花芽の摘花 5月24日

～パプリカの整枝（誘引） ～6月12日

収穫 8月21日～10月25日

（2）考 察

二重被覆のハウスで栽培したため、日焼けせずによいパプリカが収穫できた。

育苗日数が長いため、灌水作業に労力を必要としたことから、自動灌水システムの導入を検討する必要がある。

収穫期間も長く、単価の高い作物であるが、水稻育苗後の作物として5月下旬もしくは、6月上旬での定植による栽培について検討を必要とする。



↑栽培中のパプリカ

5 冬野菜

市内の直売所等においては、冬期も地元産の野菜に対する顧客の需要があるが、その時期は品薄の状態となっていることから、パプリカの後作で冬菜6品目を無加温で栽培する。

(1) 試験方法

ア 供試品目 (品種)

- (ア) ちぢみ小松菜
- (イ) サラダほうれん草
- (ウ) かき菜
- (エ) アスパラ菜
- (オ) のらぼう菜
- (カ) かつを菜

イ 栽培管理・施肥

(ア) 栽培面積

(マルチ張り、3畝)

18 m² (各3 m²)

(イ) 栽植密度

畝間90 cm、株間15 cm

(ウ) 栽培経過

播種日 11月6日

収穫 令和6年1月12日～令和6年2月16日



↑ 試験区全景

(2) 試験目的

二重被覆ハウスの防寒性能を確認するために、不織布敷き無し、トンネル (ビニール) 設置無しで栽培する。

(3) 試験結果

ア 生育調査

(播種後50日)

	品 目	草 丈	葉 長
①	ちぢみ小松菜	10 cm	15 cm
②	サラダほうれん草	7 cm	8 cm
③	かき菜	12 cm	15 cm
④	アスパラ菜	7 cm	13 cm
⑤	のらぼう菜	9 cm	12 cm
⑥	かつを菜	8 cm	18 cm

(播種後80日)

	品 目	草 丈	葉 長
①	ちぢみ小松菜	15 cm	17 cm
②	サラダほうれん草	12 cm	18 cm
③	かき菜	16 cm	23 cm
④	アスパラ菜	20 cm	22 cm
⑤	のらぼう菜	13 cm	18 cm
⑥	かつを菜	18 cm	30 cm

ウ 収穫期間

	収穫期間	播種後日数
トンネル有り (参考R4年度)	令和4年12月7日～ 令和4年12月28日	36～57日
トンネル無し (参考R4年度)	令和4年12月27日～ 令和5年1月20日	56～80日
トンネル、不織布無し (R5年度)	令和6年1月12日～ 令和6年2月16日	67～102日

(3) 考 察

二重被膜ハウスで防寒性能が高いといえども、ビニールトンネルのある場合、60日程で収穫できるものが、ビニールトンネル無しの場合、70～100日程かかってしまった。

次に栽培する春レタスの定植時期に間に合わせるためにも、トンネル等の防寒対策をすることは必要。



↑栽培中のちぢみ小松菜

小玉スイカの試験試験

1 試験目的

J A 佐久浅間で将来的な振興が予定されている小玉スイカの試験栽培を行い、野菜栽培に取組む農業者に新しい品目の選択肢を広げるためのデータを得る。

2 試験について

(1) 供試品種

ピノ・ガール

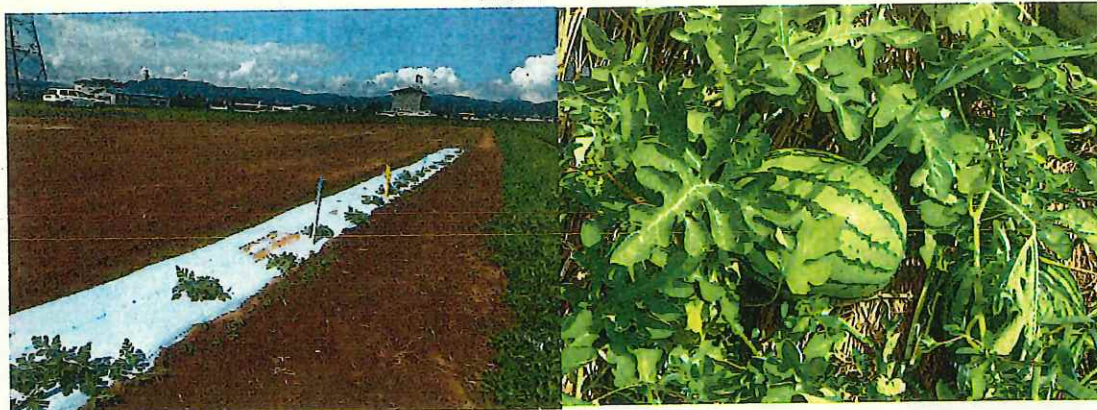
(2) 試験内容

収穫時期（積算温度）の違いが、品質に与える影響について、検証した。

(3) 栽培経過

6月 8日	定植
6月27日	ツタの誘引（4本仕立て）
7月10日	追肥（8-8-5）、一株30gの施肥
7月10日	摘果（一番果、二番果）
7月18日～	受粉確認（受粉日をテープに書き込む）
7月21日～	受粉作業
7月26日	トンネルのビニール撤去
8月 7日	試し採り
8月 8日	収穫開始
8月22日	収穫終了

栽培中の小玉スイカ



(全景)

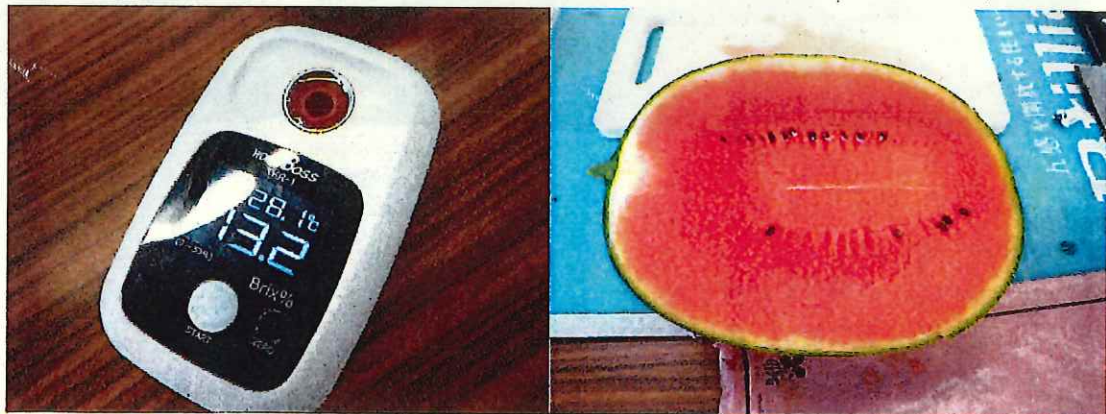
(近景)

(4) 試験方法

- ア 受粉日、収穫日を記録する。
- イ 受粉日から収穫日までの積算温度を計測する。
- ウ 収穫時に糖度計により糖度を計測する。
- エ 糖度と積算温度との関係性をデータ化し、考察する。

3 試験データ

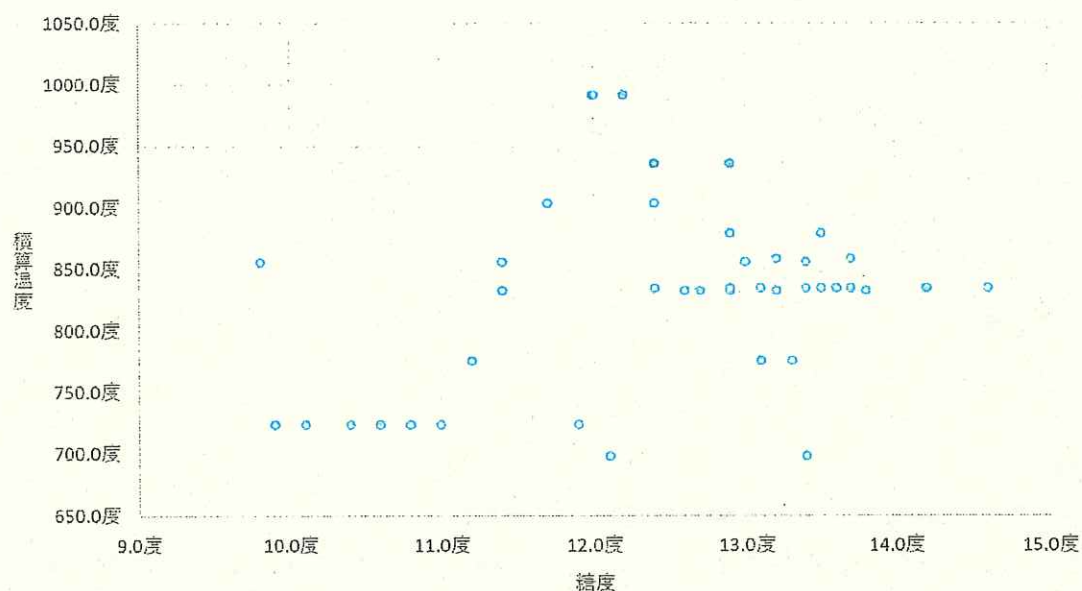
No.	収穫日	糖度	積算温度	No.	収穫日	糖度	積算温度
1	8月7日	12.1度	698.3度	23	8月15日	12.9度	833.0度
2	8月7日	13.4度	698.3度	24	8月15日	12.6度	833.0度
3	8月8日	11.0度	724.5度	25	8月15日	13.2度	833.0度
4	8月8日	10.8度	724.5度	26	8月15日	11.4度	833.0度
5	8月8日	10.4度	724.5度	27	8月15日	13.8度	833.0度
6	8月8日	10.8度	724.5度	28	8月15日	12.7度	833.0度
7	8月8日	10.6度	724.5度	29	8月22日	12.0度	991.8度
8	8月8日	10.6度	724.5度	30	8月22日	12.2度	991.8度
9	8月8日	9.9度	724.5度	31	8月22日	12.9度	936.4度
10	8月8日	11.9度	724.5度	32	8月22日	12.4度	936.4度
11	8月8日	10.1度	724.5度	33	8月22日	13.2度	858.8度
12	8月10日	11.2度	775.8度	34	8月22日	13.7度	858.8度
13	8月10日	13.3度	775.8度	35	8月22日	13.6度	835.0度
14	8月10日	13.1度	775.8度	36	8月22日	14.2度	835.0度
15	8月15日	12.4度	903.9度	37	8月22日	13.4度	835.0度
16	8月15日	11.7度	903.9度	38	8月22日	12.9度	835.0度
17	8月15日	13.5度	879.4度	39	8月22日	12.9度	835.0度
18	8月15日	12.9度	879.4度	40	8月22日	14.6度	835.0度
19	8月15日	13.4度	856.3度	41	8月22日	13.7度	835.0度
20	8月15日	13.0度	856.3度	42	8月22日	13.5度	835.0度
21	8月15日	9.8度	856.3度	43	8月22日	13.1度	835.0度
22	8月15日	11.4度	856.3度	44	8月22日	12.4度	835.0度



↑糖度計測の様子

4 試験データのグラフ化

小玉スイカ糖度と積算温度の関係



5 考察

- ・ 7月中旬から8月初めまで雨がなく、8月初めの降雨により、急激に肥大したことから裂果が生じ、積算温度750℃付近で収穫した果実は、糖度が10度から11度が多かった。
- ・ 積算温度850℃付近で収穫した果実は、糖度が13度から14度と高かった。
- ・ そのため、佐久市では積算温度850℃付近による収穫をすることが良いと考えられる。
- ・ 今回の積算温度の計測は、「おんどとり」を使用したことから、積算温度からの収穫ではなく、受粉日からの経過日数で収穫を行い、後日「おんどとり」のデータから、積算温度を割り出している。
- ・ 受粉日からの経過日数での収穫ではなく、「積算温度計」を導入し、積算温度800℃もしくは、850℃に達した時点での収穫を行い検証する必要がある。

ニホンムラサキの試験試験

1 試験目的

古くから染色作物として利用され、青みがかった紫色「江戸紫」の染料として用いられている「ニホンムラサキ」を3品種栽培し、佐久地域での気候風土に適しているか検証を行う。

自然界のニホンムラサキは、冷涼な気候を好む。

現在、その数は減少しており古くから染料として使用されているものの、栽培方法は確立されていない。

2 試験について

(1) 供試品種

タケダ、イズモ、タンバ

(2) 試験内容

無マルチでの栽培と、マルチ栽培を行い、生育状況を見る。

ニホンムラサキは、多年生であることから、染料として使用する部分である根の量を増やすため、3年程度の生育期間を見込む。

(3) 栽培経過

令和4年6月 定植



令和4年7月19日撮影



令和4年9月5日撮影



試掘した根の状況 (令和4年12月15日)

(4) 令和5年の状況

令和5年春に発芽したものは、マルチ区での1株のみであった。

3 考察

- ・令和4年中は順調に生育したものの、多年草であるが令和5年の春に発芽したものが、マルチ区の1株のみとなった。

- ・越冬ができなかった原因として考えられることは、もともとニホンムラサキは北海道でも生育が可能な植物であることから、耐寒性はある植物と思われるが、今回使用した品種が西日本由来の品種であることから、氷点下十数度の低温に耐えられなかった可能性があることのほか、佐久は降雪量が少なく乾燥する地域であることから、低温+乾燥により越冬できなかったものと考えられる。

1年生で、根の利用が可能なのか染色事業者側での検討が必要。

*令和6年度までの試験としていたが、株が1株となってしまったことから令和5年度をもって試験を終了とする。

4 「試験品目及び試験事業の普及活動」

(1) 佐久市新品目導入試験事業講演会

ア 開催趣旨 佐久市営農支援センターでは、平成 23 年度から「新品目導入試験事業」に取り組み、「新たな佐久市ブランド品の育成」、「収益性の高い転作作物の実証と新技術の導入試験」を目的に佐久市に適した新品目や新技術の導入・普及を図っています。

市内の農業関係の皆様などが一堂に会する中、今年度の新品目導入試験事業の試験結果を報告するとともに、佐久市内の農業振興に資する講演会を開催します。

イ 開催日 令和 6 年 1 月 25 日(木)

ウ 主催 佐久市営農支援センター

エ 開催場所 佐久市市民創錬センター 大会議室

オ 参加者数 70 名

カ 内 容

(ア) 新品目導入試験場ほ場での栽培試験の結果について

(イ) 佐久市の農産物に期待することについて

講師：日栄物産(株)長野事務所 所長 山本 容子 氏

(ウ) 鳥獣被害の現状と対策について

講師：佐久地域振興局林務課 鳥獣対策専門員 山下 よう子 氏



(3) 野菜栽培講習会

直売所等に出荷できる野菜農家を育成するため、栽培技術に関する講習会を実施。

講習会日程

回数	実施日	内容
1	4月14日(金)	(座学) 苗の選び方と遅霜対策 (実技) 葉物の定植、播種
2	5月12日(金)	(座学) 病害虫の防除方法 (実技) ミニトマト、ピーマンの定植
3	6月2日(金)	(座学) 病害虫の防除方法 (実技) 野菜類の栽培管理
4	7月7日(金)	(座学) 先輩農業者のアドバイス (実技) 野菜類の栽培管理
5	7月28日(金)	(実技) 野菜類の収穫、栽培管理 (座学) カボチャの栽培方法等
6	8月18日(金)	(座学) 秋野菜の栽培管理 (実技) 野菜類の収穫等
7	9月8日(金)	(実技) タマネギの播種
8	10月20日(金)	(座学) 土づくりの基礎、肥料の種類等 (実技) タマネギの定植等
9	11月24日(金)	(座学) 次年の作付け計画等
10	2月2日(金)	(座学) 育苗・販売について (実技) 冬期間のビニールハウスを利用した葉物野菜の栽培管理



実施主体 : 佐久市営農支援センター

住 所 : 佐久市中込3056

電 話 : 0267-62-3203

F A X : 0267-62-2269